

# 成長への布石

素材メーカー  
繊維トップに聞く

170

## 円安で受注が戻る

——年初から円高是正が進んでいる。

円高で韓国、台湾に流れていた合繊テキスタイルの受注が日本に戻ってきている。昨年は一時的に減産を強いられたが、今上期は100%稼働に回復している。中でも米国向けの戻りが顕著だ。欧州でも韓・台品からの置き換えが起きている。一方、国内向けは円安で海外調達、海外縫製がコストアップしていることもあり、付加価値の高い日本素材に回帰する動きが部分的に見られる。

しかし、産地の景況感はまだら模様だ。スポーツアパレルや自動車生産などではサプライチェーンそのものが海外に移転し、円安で

丸井織物社長 宮本徹氏



# ニーズ吸い上げ、迅速開発

いる。06年に「テキスタイルスタジオ」、今年には染色ラボの「Dスタジオ」を設け、開発チームの増員を含め、ヒト・モノ・カネのインフラを整った。あとはお客の意見をくみ上げながら、開発のスピードを上げていく。

産元商社との取り組みも強めたい。企画・生産機能を磨き、産元商社の企画・販売機能と結んで新しい商流を開拓したい。アパレルと結びついて

これが必須になっている。今後の原糸やポリマーの進化も含め、合繊の扱いやすさや機能性を生かした素材は、ダウン側地だけでなく、パンツやシャツ、産業資材などあらゆる分野で可能性があると思っている。カジュアルやアウトドアの分野で天然繊維調のパンツ素材が次の芽になっているが、これも単にタッチが綿ライクなだけでなく、暖かさや乾きやすさ、ストレッチ性など合繊ならではの機能が加わっていることがポイントだ。

一時的に止まったとしても基本的な枠組みは変わらない。だが、この為替状況で「何でも海外へ」の流れは止まった。日本が見直される時期にあり、われわれも生き残るためにやるべきことをしている。円高で逆風もあったが、自分たち自身を見つめ直すきっかけもなった。

## 協調と競争で効率化

——開発投資を積極的に進めて

Dスタジオの設置で、「染色まで始めるのか」と聞かれるが、狙いは開発スピードを上げることにある。既に試染がスタートし、商談も以前よりクイックになっている。機屋が染め工程を意識することでサプライチェーン全体の効率化が図れる。糸、織り・編み、染めがベクトルを合わせ、「協調と競争」によりワインウインの関係

我々としては、安全、便利、かつこいなど素材に求められるスペックを押しさえつつ、一定こなれた価格で二極の間にある中間ゾーンをいかに取り込めるかがカギになる。開発のネタは尽きない。軽量化高密度織物のブームは収束したが、「軽い」「コンパクト」「高機能」といった基本ニーズは今後も変わらないだろう。携帯電話、スマホ、薄型テレビ、掃除機など

身の回りのを見てもあらゆる商品に進展に期待している。自身も勉強できるし、取り組みの

これまではあまりなかったが、